

環境文明社会づくり あれこれ (58)

源流 (58)

広島を拠点とする株式会社カンサイの川本義勝社長も、本賞の受賞者（第4回）だ。真に個性豊かで先見性のある（時には社員もついていけないほど早すぎる）清掃業の二代目の産廃経営者である。時代の動きに敏感で、当時としては高度の処理技術をいち早く取り入れたり、郊外に広い農地（「きなり村」と命名）を手に入れ、アーティチョーク栽培や飴の製造、地鶏養鶏、レストランの経営などにも手を広げ、社員が首をかしげていたほどだが、本人は大得意。典型的なワンマン社長で、社員の意見など聞く耳はない風。

この社風を一変させたのが三代目の川本義二 現社長。キッカケは、義勝社長が社員教育に私とコノエさんの力を借りたいと思いつき、その研修事業の計画と実施を長男の義二さん（当時は専務）に託したことである。義二さんは社員の可能性を信じ、早速「環境力道場」を設け、全力を挙げて社員研修に取り組み、社員間の連携を密にし、詳細ではあるが手作り感いっぱいの環境レポートを毎年発行させ、共通の心構えを社員自らが何

度も話し合って作り上げた社員の「手帳」に明記させ、社業の高度化を成功させた。一見、父親を“半面教師”にしての成功に見えるが、頑固ながら先見性のある親あればこそその父子伝承と私たちは見ている。環境創造総合企業を目標にしているカンサイの今後の進展を期待している。

武州工業株式会社の林英夫社長（現相談役、第6回受賞者）は、メーカーの社長らしく正統派の技術者で、きちっとした前向き姿勢の持ち主である。面接に伺って強く印象に残ったことが二つある。一つは、東南アジアと比べて人件費が高い日本の製品はかなり割高であるとの認識が一般的だった時に、「当社製品は、品質はもとより価格の面でも負けない」と明言。その秘密は、製造現場で流れ作業をやめ、一人ひとりの社員が全工程を受け持ち、誇りと責任を持って完成品を作る「一個流し生産方式」を独自に採用していること。もう一つは、創業以来赤字を出さず、税務署管内の“優良納税者”として毎年表彰されていることだ。この社長なら、「ムリ・ムダ・ムラ」を避け、環境にやさしい経営をしながら財務面もしっかり確保

加藤 三郎

していることが窺える。経営者「環境力」クラブの活動にも熱心で、高橋房雄会長の後、第2代目会長に就任し、現在、この活動の盛り上げにも尽力している。

東京・中野に本店を構える西武信用金庫の高橋一朗理事長は極めてユニークで、私たちにとってはまことにありがたい存在だ。当会の30年を超す活動全般の独自色、特に経営者「環境力」大賞事業の意義を深く理解され、資金面でも惜しみなく支援してくれる。地域経済の中核を成す中小企業の経営が永続し、前向きに発展するためには何が必要か、そして信用金庫がすべきこと、できることを熟知しているだけに、飯能信用金庫はじめ、他地域の信金にも声をかけてくださり、「環境力は経営の総合力」との認識を経営者に広めるのに尽力してくださる。高橋理事長の経営姿勢を反映してか、西武信金スタッフたちも極めて前向きで、私たちに進んで協力してくれるのが嬉しい。このように少数でも立派な経営者が各地にいることが日本の底力だと思う。

